

名物”松ちゃん”の話

昭和の始めといっても戦前のことなのですが、堀ノ内火葬場の近くの植え込みの中に松ちゃんという一風変わった乞食が住んでいました。

松太郎というのが名前だったそうです。が本名など知る人はいませんでしたが、松ちゃんは五十歳位で、日露戦争で負傷したとかで片足が不自由で杖をもって居ました。この頃の乞食といえは妙法寺の縁日に仁王門の前で顔をすすで汚れた人達が来て物乞いをしていました。松ちゃんはこんな連中とは全く違ったタイプの乞食で、いつも古外套に古ぼけた帽子をかぶって歩いている姿は、その頃はやった西洋乞食に似ていました。

毎日のように、当時は電車通りだった青梅街道の酒屋へ行つては店先で冷のコツプ酒を飲むのを楽しみにしていました。もちろんお金は払っていませんがお店にとっては招かざる客だったのです。

しかし子供たちは松ちゃんに親しみをもっていました。

そしてこの名物松ちゃんは昭和十年のある日、植え込みの中の小屋で病気を患い死んでしまいました。

その葬儀には相当な高官も来たとかで人々を驚かせたものでした。松ちゃんの素性は誰も知らず、謎の人物だったようです。いつも松ちゃんの世話をしていた高円寺三丁目の方が警察の検死がすむと供養のため松ちゃんの足に「南無妙法蓮華經 松太郎」と墨で書いて隣の火葬場へ運びました。

それから三年たったある夜のこと、松ちゃんの世話をしていた方のお宅へ大阪から一人の来客がありました。その人の話によれば、三年前に生まれた男の子の足に「南無妙法蓮華經 松太郎」という文字が書かれ誰に祈祷してもらっても消えず、どこでも尋ねたのか松ちゃんの世話をしていた方を探しあてて来たのです。はたと膝

をたたいたその人は、お客と一緒に大阪のその子供のところに行き、足に書いてある字を見ると確かに見覚えがあり早速お題目の「南無妙法蓮華經」を唱えながら湿した脱脂綿でこすりました。次第に字はうすくなりやがて完全に消えたのです。

人間の霊は移るのでしょうか。本当に不思議な話でした。

「ふれあい」第六十三号に掲載された

名物”松ちゃん”の話

6月の休館日/2日、8日、9日、16日、23日、30日

地域を知ろう 民話・伝説 No.15 松ちゃんの話

名物”松ちゃん”の話

昭和の始めといっても戦前のことなのですが、堀ノ内火葬場の近くの植え込みの中に松ちゃんという一風変わった乞食が住んでいました。

松太郎というのが名前だったそうです。が本名など知る人はいませんでしたが、松ちゃんは五十歳位で、日露戦争で負傷したとかで片足が不自由で杖をもって居ました。この頃の乞食といえは妙法寺の縁日に仁王門の前で顔をすすで汚れた人達が来て物乞いをしていました。松ちゃんはこんな連中とは全く違ったタイプの乞食で、いつも古外套に古ぼけた帽子をかぶって歩いている姿は、その頃はやった西洋乞食に似ていました。

毎日のように、当時は電車通りだった青梅街道の酒屋へ行つては店先で冷のコツプ酒を飲むのを楽しみにしていました。もちろんお金は払っていませんがお店にとっては招かざる客だったのです。

しかし子供たちは松ちゃんに親しみをもっていました。そしてこの名物松ちゃんは昭和十年のある日、植え込みの中の小屋で病気を患い死んでしまいました。その葬儀には相当な高官も来たとかで人々を驚かせたものでした。松ちゃんの素性は誰も知らず、謎の人物だったようです。いつも松ちゃんの世話をしていた高円寺三丁目の方が警察の検死がすむと供養のため松ちゃんの足に「南無妙法蓮華經 松太郎」と墨で書いて隣の火葬場へ運びました。

それから三年たったある夜のこと、松ちゃんの世話をしていた方のお宅へ大阪から一人の来客がありました。その人の話によれば、三年前に生まれた男の子の足に「南無妙法蓮華經 松太郎」という文字が書かれ誰に祈っても消えず、どこでも尋ねたのか松ちゃんの世話をしていた方を探しあてて来たのです。はたと膝

